

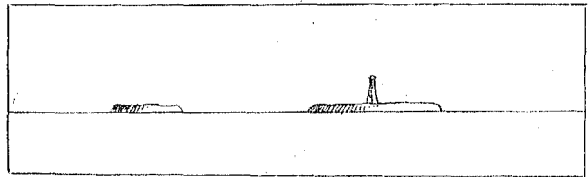
蘇士埃及紀行(渡歐日記)
第七信

寺田貞次

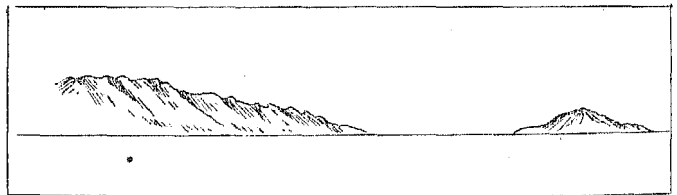
五月廿九日 晴。狭い紅海さは云ひながら今日も陸が見えない、少々の風もあり波が高い。晝には東經三十度四十四分、北緯二十一度五十二分、丁度メツカ(Alex)沖を通て居る、蘇士迄は五百六十餘哩である、午後風漸く和き波も靜になる、事務長からカイロー行に關する注意があり、河原田氏を團長として旅行する事になる、募集の俳句や川柳もだいぶ厭きたので、今度は香取丸婦人會發起と云ふ名義で和歌が募集され、願は水鳥及び旅であつた。

三十日 晴。波尙割合に高い、氣温は八十二度で昨日來急に涼しくなる、數度往來の織田博士も紅海で斯る涼氣は珍らしいと談て居られた、例に依り小口、本永、關水氏等と談て居ると午前十時頃 H. Ober の鎌田氏から通知が來た、左舷正横に the brothers Is. が見えるを、觀るゝなるほど地平線上に低平な白色の陸が幽かに見える、望遠鏡で注視する島は白砂のみで何も無い様で大島の方に燈臺が一基屹立して居る、愈々蘇士に近づいたなと思ふて居ると、午後三時頃には兩側に陸影を眺める様になつて來た、右舷に見えるのはシナイ半島で左舷のは阿弗利加である、案内記にかのモーセスが神から十誠を受けたと云ふシナイ山等と書いてある山も見え、山頂には傳説の大洪水の時、殘つた鑽がある等と話して居るのも聞える、海岸に

蘇士埃及紀行



島 諸 ス ー ザ ラ ブ



何にも壯麗であつた、夜には涼しい甲板上で昨日募集和歌の披露會が開かれる、織田博士の二首が最高點であつた愈々明日は着港である。

は島も多數に横つて居り、餘程接近して通つたのでよく觀察し得ました。シが相變らナす岩石質イの草木一半つだに無い禿山で島あり、阿弗利加側の連山は鋸山式で日没の太陽が美しく没する景色は如

三十一日 晴。起床すると既に蘇士灣に着して居る、船

員並にカイロー旅行者に對する檢疫がある、甲板に出て觀ると蘇士町からほゞだいぶ隔つた處に碇泊して居るので、砂漠の上に白屋根の家屋が少し眼につく、防波堤らしいものも在り、船が二三艘居る様に見える、椰子様の植物が少し生へて居る様で處々緑の色も眼につく何と申しても淋しい景色である、運河の入口は何處か一寸知れない、左舷には高臺性の丘陵が近く横つて居る相變らず草一本ない赤褐色の岩山で水平の地層が美しく見えて居る、古くアラビア人等がカイローの方に行く道は此山邊を越して居たものかな等と古い歴史を思ひ出す、右舷にも同様高臺性赤禿の丘陵が遙に連亘して見える、天氣晴朗海は一層に青く、強く照りつける日光は砂石に映じて思はずアラビアの特性を感じしめた、赤い土其耳帽を冠た、色の黒い土人が小舟で集つて来る、英人の土其耳帽を冠て居るのも眼につく、歐洲大戰の結果埃及が獨立して以來全部此の帽を用ゐる事になつたのだと誰か説明して居た。碇泊中多數の土人がアツキに來て土其耳玉の頸飾、繪葉書、椰子葉製扇等各種産物の陳列が開始される朝食後河原田團長から旅行中の注意がある、同勢五十一名案内者は前述の南部氏で、説明者としてサラ一並にタラワナと云ふ二名のアラビア人が付く、旅費は汽車二等の者七磅半、飲料は各自が定まる、九時のランチで上陸すると間もなく香取丸も出帆、キヤナルに向て進だ運河は幅が狭いので船は先づ入口迄進み順次を定めて通行を待つのである。

始めて砂漠地を踏んで海岸迄來て居る列車に乘る、軌道は勿

論廣軌で、客車は一、二、三等に分たれ、吾々は二等車に入つた婦人の席が別に設けられて居る、かく申すも如何にも完備した様に聞えるが餘り氣持のよい客車でもなかつた、驛の附近には稍褐色の洋館が建て居りアカシア風の熱帯性綠樹が戸前に植えられ、熱帯特有の濃紅な草花も咲いて居る、然し之は餘程人工を加へて居るものらしく普通ならば到底植物の生育し得る處さも考へられない、豫定の通り十時半に發車、蘇士町を通る、相當の人家が在る(案内記には人口二万)が、皆岩石と土とで固めた様な粗末な建物で珍らしい鐵路は運河に沿ふて走て居り沿岸は流石水の御蔭で椰子を初め熱帯性植物が茂て居るので緑に見えるが、其の他は一帶の沙漠で草一本生へて居ない何か生へて居ると思へばメキシコ邊で聞く様なシヤボテンであり、沙漠中の沃地(Orchard)も此の邊には夫らしいものがない、玉蜀黍、麥等の畑、牛、驢馬、駱駝の放牧地が稀に在るが之れとても極く貧弱なものである、然かし此一面に褐色な乾燥な死せるが如き沙漠地を通して生々とした運河は美しい濃藍色を呈して走て居り、我が香取丸は黒煙盛に全速力を出して吾人を見送て來る最初のレーク、ビッター(Bitter)の處で香取丸に別れ晝頃イスマイリヤ(Ismailia)驛に着く、第二の湖水 Tinsah に濱し所謂 Oase であるので此の地方の中心として發達し、兵營も此處に置かれて居る、約三十分休憩の上、カイロー行に乗りかへ愈々運河と別れ殆ど直角に西走する、相變らず廣漠たる赤褐色の沙原で運河の沿岸と異つて純然たる沙漠、人家などは到底見られぬ、日光は強く沙上を照らして暑々益々烈しい空をあげると微

細な沙塵が車内に没入して来るのであける事が出来ない、然かしあけて置かれば著しく堪えられない、酷暑と砂塵になやまされる沙漠の旅は如何にもエキヤラバン等と思ひやる、我が皇太子殿下行啓の御には所謂 Sand storm に御出合ひになつたかき聞て居るが恐懼の至りである、こんな調子で何處迄つゞくか悲觀して居る中、何時の間にか緑色を見る様になり、意外にも立派な田圃地に入つた、今迄の赤褐色の死た様な荒野は緑濃かな椰子樹林となり、耕作美しき田畑と變し、土人の住家さへ各所に見受くる様になつた、斯くも荒蕪たる景色であつた沙漠の一朝にして美田に變ずるかと思ふと不審の感にうたれたが、之ぞ全くナイル河の御陸であると思つた時、今更ながらナイルの偉大な感ぜざるを得なかつた、埃及がナイルの氾濫に因て云々等は三尺の兒童もよく知つて居る事柄ではあると申せ限當り來て觀るに非ざれば其の眞情を察する事の出来ないものは此のナイルであると思ふた、見渡す限り渺々たる美田は誠に廣いものである、之れがナイル、デルタの一小部分かと思ふと又感慨にうたれる、栽培物は確かに棉花であり、小麦も間々見受けられる、カイロ一府に近づくに従つて部落も漸次大きくなり午後三時頃には Zagazig 並に Benha 等の驛を通り、南部氏の案内で遂にギゼーのピラミッドを眺めつ、四時半カイロ一府に着した用意の自働車に分乗、余は例に依り徳岡、小口、本永、渡邊諸氏並に國民新聞記者菱沼右一氏と同乗、市街通過直にギゼーのピラミッドに向ふ、餘り急がしいのであたら感想も涌出の暇もなく立派な道路、厥風の高大な建築物すべて變化の急速なるに驚き

蘇土埃及紀行

つ、手入よく行き届ける公園街を通るとナイル河、無量の感にうたれる間もなく早や向ふの丘陵にはピラミッド然と相並んで吾人を待て居る、美しい田圃の中に造られてある並木蔭たる道を清涼な夕風をうち切りつ、一直線に迅走する爽快忘れる事が出来ない、丘陵下には家屋數軒立ち並びホテルも設られてある、多數の駱駝が地に低く座して吾人を待て居る、幾度も讀たピラミッド見物記事を現出するのにかと思ふよき氣持もしない自動車番號順で駱駝に乗る、愈々勢揃が出来ると出發である、ピラミッドは此の丘陵の上に在るので之から少し坂路になる、或は寄り或は離れ或は遅れ繰りつゞき登る、自動車旅行に引きかへ如何にも悠長で面白い、然し駱駝者は旅行記に見る如く矢張り無心を云ふ、自分の駱駝も最初に Do you speak English? と尋ねた、Yes と答へると無心を云ひ出すからうるさいから無言で通した等と書てあるのもあつたから、自分は I can not と答へた、然かしそう答へる以上は少しは解ると思はれたが、時々足もさなつ、いて煙草をくれと訴へる、持て居ないと云ふと又わからぬ言葉で何か知らん議る、大勢だから平氣で居るもの、甚だ氣持がよくない、悪い駱駝になるも駱駝を馳けさせて困らす事もあると聞て居たが、中には馳けさせられた人もあつた様だが自分の駱駝は幸おさないので、歸途には殿軍になり少し心配したが無事であつた、丘を登ると一帯の臺地でピラミッドは高く天空に聳え、ナイルの低地は眼下一望のものに展開して居る、又感慨無量、大ピラミッドの石階上に例のラサーが立て熱心に説明してくれる、サウザンド、サウザンド、イーヤース

と古い事を云ふて居る、誠に紀元前五千年の歴史を眼のあたり観、世界文化の發祥等と思ふと感想も盡きないが説明がすむと又引張られて少し下方に在るスフィンクスの處に至り一同紀念の撮影をやる、附近には小ピラミッドも散在し、石造殿堂の遺物もあるが時間もなく、遺憾ながら之れで見物を終り引きかへした、丘陵の麓から此處迄は僅々二三町に過ぎない、然るに緩々たる蹄靴等に乗りに不快な馭者の無心を聞き、ピラミッドにあこがれつゝも其遺石にすら觸れる事すら出来ず歸るのは如何にも遺憾である、此の地の岩石は石灰質で、赤色を帯びた花崗岩も落ちて居た、石灰岩には無數の化石を含有して居るので採集を希望したが夫も出来ず漸く馭者に拾はせて二三で満足せざるを得なかつた、日も段々暮れて來るので大急自動車に分乗もとの路を引きかへし、電燈の光美しい市内を走ってホテルに到着した今日觀たカイローの町は單に瞥見に過ぎないけれどもすべてが歐風に出来て居り、道路は香港や新嘉坡と同じくアスファルトの堅固な道であり、建築物は邊境の土民住地を除いては皆歐風で公園も手入よく荒蕪たる沙漠地の町さと思はれない、身既に西歐に在るの感に打たれしめた、ナイルに架せる橋の如き實に立派なもの、ホテルも完備して居り、玄關前の廣場は露天の食堂をなし、熱帯性植物の植木の下、晝より明るい白熱燈の光をあびて食事する爽快で、日本で申せば夕涼の氣分で至る處の茶店に皆戸外に椅子を並べビールや清涼飲料に意氣を養て居る處は我が國の夏と同一さば云ひながら亦趣ある景色であつた。

六月一日

晴。今日は午前申市内見物、晝頭發車、夕

トセイド歸着の豫定である、早朝起床、六時半食事、七時には各自動車分乘出立する、最初案内されたのは Old Cairo である、現市街の西南の一角、ナイル河畔に在る、舊市街で早く土砂の爲に埋設して居た、現今發掘廣漠たる街區の殘骸恰も燒跡の部の感あらしめる、遺跡の中央に車をさゞめて説明を聞く、建築物は既に取毀たれて居るが現今と同様煉瓦造であるから其のプランだけは明に觀る事が出来、或は湯殿、或は便所、或は水道、或は城壁等の跡が面白く見受けられた、一部は今尙發掘中で古い瓦石累々として、何分古い遺跡であるから建築上の彫刻品、日常用の陶器類等、美術上、考古學上の好藝考品の發掘も多かつた由で今尙一般の入場を拒絶し其の蒐集につとめて居る、説明者は市街の埋設を地震に歸して居るが、斯くも全市の埋設を觀る吾人は自然力の偉力を知りつゝも猶疑惑の念に打たれざるを得なかつた、遺憾ながら暫にして去り市街の極く狭い道を出りつゝ、アリー寺 (Alahmad Ali) に參詣する、町の南部 Citadel と云ふ處の高所に立ち回歐風の壯麗な建築で高大なるドーム其の兩側に立ち天をしのぐ高塔、堂内の金碧燦爛たる建築學上からは面白いものであらう、後庭からは全市街を見下す事が出来る、過日ピクに登って香港市街を眺めたのとは全く反對に、此處は一帶が茶褐色で附近の沙漠と相應じてどんよりした景色前に觀たオールドカイローの殘骸は如何にも哀に見えた、此の邊も昨日見たピラミッド附近と同様石灰質の岩石多くの化石を認める、寺を出て附近に在る尙一ヶ寺を觀、堂内安置の埃及王の墳墓を拜し、宮殿前を走り博物館に着した、堅固な石造

建築物で古埃及の遺物を以て充満して居る、ギゼーの火ロラム
ツド内の遺物だけでも一室をなして居る、時間の都合で單なる素
通りで、再自動車の客となり十時半カイロ發にて歸途につい
た、昨日から今日にかけて僅か數時間の見物、夫は世界文化の
發祥地、其の古き歴史を其の貴き遺物に残して居る此の古い遺
蹟の訪問としては餘りに貧弱である、或る訪問者は氣候の酷熱
と砂塵の多き再度の來訪を拒絶して居たが自分に取ては見物時
日の少きに反比し遺憾の度を深く感ぜしめられた、昨日觀た豊
饒な棉花畑を厭もせず眺めつ、再沙漠の域に入り、昨日乗りか
へたイスマイリヤを通過し、之よりは蘇士運河に沿ふて北に走
る昨日に比し汽車は直接沿岸を通るので運河の狀況は詳細視察
する事が出來大船の來往する景色は却々壯觀で一同車窓から熟
視、運河の歴史等繰返す者もあり、運河の廣狹を論ずる者もあ
り甚愉快、沙漠の苦熱を忘れしめた第三の湖水 *Bah* を通り
最後の *Mendeh* 湖畔に出で間もなく披西士 (*Port Said*) に着した
三時半頃であつた、港には香取丸は既に吾人の歸着を待つもの
、如く、着驛を觀た甲板上一人は手を振り歡迎の意を表し
て居た、下車南部兄弟商會に一体、當市では大きい雜貨店で買
物も盛に行はれる、埃及的人物花鳥等を織込んだ布、土其耳織
等が注意を引く、税關を通路しランチで歸船した、昨日來だ
いぶ疲勞したので早速入浴休養した、夕頭甲板に出て港内を眺め
る、船は丁度運河の入口に碇泊して居り狭いながらに灣形を備
へ西側には市街の建物が並で居る、灣内には二三の汽船の他、
英國軍艦數隻碇泊して居た、新式戦闘艦の雄姿が殊の他衆目を

蘇士埃及紀行

引いた、蓋埃及獨立問題の結果であると言せられて居る、豫定
より稍遅れ七時半解纜する、黄昏に西側防波堤の傍に立てる運
河開鑿の恩人レセツプスの雄姿を眺めつ、船はやがて地中海に
入つた、豫て聞て居た通り内海に入るさ急に涼氣を催し九時頃
には氣温七十八度になり船床毛布を用ふる事になつた、夕食後
は埃及旅行團長河原田氏から旅行費等の報導があつた。

○パナマ運河開通十年

パナマ運河は開通後十年に丁度なつた。この間に二千五百隻
の船が通つた。昨年は五百隻通つて其通航料五百萬磅に上り、
運河を用ひた爲めに約二億萬哩の途を減じ得たことになる。昨
年の狀況を以てすれば今後投資に對する利益配當は大なるべし
さのことである。猶ほ大開門を作る新計畫が實行されるさマデ
エスチック丸やレヴィアサン丸などの大船も通航することが出
来る様になるさいふ。

パナマ運河の爲に一番大きな影響をうけたのはヴァンクーヴ
アーで西部カナダ産の小麥をこゝからパナマを経て歐羅巴に輸
出して利益のある様になつたことである。其が爲にヴァンクー
ヴァーは大に發達する様になつた。